

これからの私たちがすべきこと

中沢中学校 西山 佳佑

「平和とは何か。」平和といっても、様々な平和があると思う。「社会の平和」、「心の平和」、「世界の平和」。その中で、大抵の人が平和から連想するのは、「戦争」なのではないだろうか。そのくらい、どこかの国で今もなお戦争や紛争が起こっているのは事実だ。ニュースでは、毎日のようにウクライナ侵攻やパレスチナのガザ地区問題について放送している。それらを見るたびに心が痛むと同時にどこか遠い国のこととして捉えてしまっている自分がいる。

今回この作文を書くにあたり、ふと高祖母のことを思い出した。以前、父から高祖母が広島で被爆しているという話を聞いたことがあり、この機会に、高祖母のことをよく知っている祖父に話を聞くことにした。高祖母は戦時中、広島県広島市草津南、現在でいう広島市西区(爆心地から約5キロメートルの地点)に住んでいたそうだ。原子爆弾が広島に落とされたその日、高祖母は自宅にいたそうだ。投下された瞬間、激しい閃光と爆風に町全体が襲われ、現場は一時騒然となった。町からは全身に酷い火傷を負った人たちが助けを求めて逃げてきたそうだ。真っ黒に皮膚が垂れ下がり、どんどん倒れていった。助けられなかった。何もできなかった。本当に悲しかった。とのことだった。高祖母も曾祖母もこのことはあまり話したがらず、あとは口を閉ざすのみだったという。広島平和記念資料館が編纂し、昭和46年に刊行された「広島原爆戦災誌」によると高祖母が住んでいた地点は窓ガラスが割れるほどの被害が出ていたという。5キロ先は爆心地。きっとわれわれの想像を絶するような体験をしたのであろう。東日本大震災の被災者が、あまりの体験に口を閉ざすように、記憶に蓋をしてしまったのではないだろうか。今回この話を聞いて、自分の親族が被爆者であることを改めて実感し、祖父の口から話を聞いたことで、今まで戦争とはほど遠いものだと思っていた自分に恥ずかしくなると同時に、この話は決して忘れてはいけないもの

だと私は思った。

戦争体験は、数世代前まで家族の当たり前の歴史としてどの家族にも語り継がれてきたことなのではないだろうか。私たちの世代では、戦争体験者から直に話を聞くことも難しくなっている。だからこそ、私たちが後世に伝えていくことが使命なのだと思う。

日本は、80年間近く戦争を起こさず、平和に過ごしてきた。そのことは素晴らしいことだと思うが、身近に戦争の体験や、戦争の話題を聞くことはなくなってきたために当たり前のことだと捉えてしまっているのではないか。それは、本当に平和になったといえるのだろうか。本当の平和とは、誰もが戦争の悲惨さを忘れず、それを繰り返さないようにするために平和を祈り続けることだと私は思う。こうした世の中を作っていくために、将来を担っていく私たちの世代がもっと平和について考える機会が必要だと思う。まずは平穏な日々が送れていることに感謝し、常に相手を思いやる心が平和への第一歩なのではないかと思う。

今年の8月で、79回目の終戦記念日を迎える。この日は平和についてより一層考え、高祖母のことを思いながら、日本、そして世界の平和を願っていきたい。